

Focusrite Control

ユーザーガイド (Scarlett第二世代版)



Focusrite®
www.focusrite.com

目次

はじめに	3
システム要件	4
ソフトウェアのインストール	4
Scarlett ミキサー – 基本原則	5
Mixing & Routing ページ	6
ミキサーの構成とコントロール	7
Output セクション	8
Input セクション	10
Scarlett 機器で使用できるハードウェア入力	13
プリセットの使用	15
Direct Routing	15
2 Channel Analogue	18
8 Channel Analogue	19
Digital	20
Empty	20
使用例	21
レコーディングとトラックング	21
レコーディングとオーバーダビング	22
スタンドアロンのミキサーとしての使用	23
スナップショット機能	24
Device Settings ページ	26
INST / LINE (6i6 および 18i8 インターフェースのみ)	27
モニターコントロール	27
サンプルレート	28
クロックソース	28
トラブルシューティング	29
著作権表示と法定通知	29

はじめに

本文書は Focusrite Control のユーザーガイドです。Focusrite Control は、USB オーディオインターフェース Focusrite Scarlett 系列と併用するために開発されたソフトウェアアプリケーションです。

Scarlett インターフェースを使用する際には、本ユーザーガイドと製品自体のユーザーガイドの両方が必要となります。製品のユーザーガイドは<http://uk.focusrite.com/downloads>からダウンロードすることができます。

プロフェッショナルなオーディオ性能を誇る Scarlett と、シンプルで直観的なインターフェースを備えた Focusrite Control をお好みのデジタルオーディオワークステーション（DAW）と一緒に使用することで、非常に多目的なコンピュータレコーディングシステムが実現します。

Focusrite Control は直観的に使用できるよう極限まで設計されていますが、本ガイドを読んでいただくことにより、製品と一緒に使用するソフトウェアの特徴を十分理解していただくことで機能を最大限活かすことができます。

重要

Scarlett インターフェースシリーズは幾つかの異なるモデルで構成されますが、全ての製品で Focusrite Control を使用します。各モデルの基本的な違いは、搭載されている入出力の数と Focusrite Control から直接コントロールできる機能の数です。

Focusrite Control は、お使いのコンピュータに接続されている Scarlett 製品を認識し、それに応じた構成が行われます。そのため、お使いの Scarlett 製品に対応した入出力のみが画面上に表示されます。

自動的に認識するため、本ユーザーガイドは Scarlett シリーズの全モデルに適用されます。複数のモデルのスクリーンショットを本ガイドに掲載すると混乱を招く恐れがあるため、Scarlett 18i20 を本マニュアルの参考モデルとしています。お使いの Scarlett が 18i20 の場合、本ガイドに掲載されているスクリーンショットとお使いのスクリーンに表示されるものは完全に一致します。別のモデルを使用されている場合、スクリーン表示での大きな違いは、利用可能な入出力とソフトウェア制御機能の数のみです。

システム要件

重要

Focusrite Control と Scarlett 全製品に対応するコンピュータとオペレーティングシステムに関する最新の情報は、以下のリンク先をご覧ください。

www.focusrite.com/downloads/os

ソフトウェアのインストール

Scarlett に必要なすべてのソフトウェアおよび複数の強力かつ便利な追加ツールは、Focusrite ウェブサイトwww.focusrite.com/registerからダウンロードできます。「バンドルコード」はお使いの Scarlett インターフェースに付属のギフトボックス内に記載されています。また、シリアル番号は本製品の側面に記載されています。これらの情報は、ウェブサイトのダウンロードリソースにアクセスする際に必要となります。本手順に従うことで、最新バージョンのソフトウェアを入手することが可能です。

1. お使いのブラウザで、www.focusrite.com/registerにアクセスします。
2. 画面上の指示に従ってシリアル番号を入力し、次に、バンドルコード (XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX) を入力します。バンドルコードはギフトボックス内側に記載されています。
3. すると「My Product」ページにアクセスできるようになるので、こちらで登録した製品のソフトウェア製品をダウンロードが可能です。また製品には、必要に応じてアクティベーションコードが含まれています。
4. お使いのコンピュータに適した Focusrite Control のバージョン (MacまたはWindows) をダウンロードしてインストールします。画面上のすべての指示に従います。
5. インストールが完了したら、コンピュータを再起動します。
6. 再起動後、付属の USB ケーブルで Scarlett インターフェース をお使いのコンピュータに接続します。

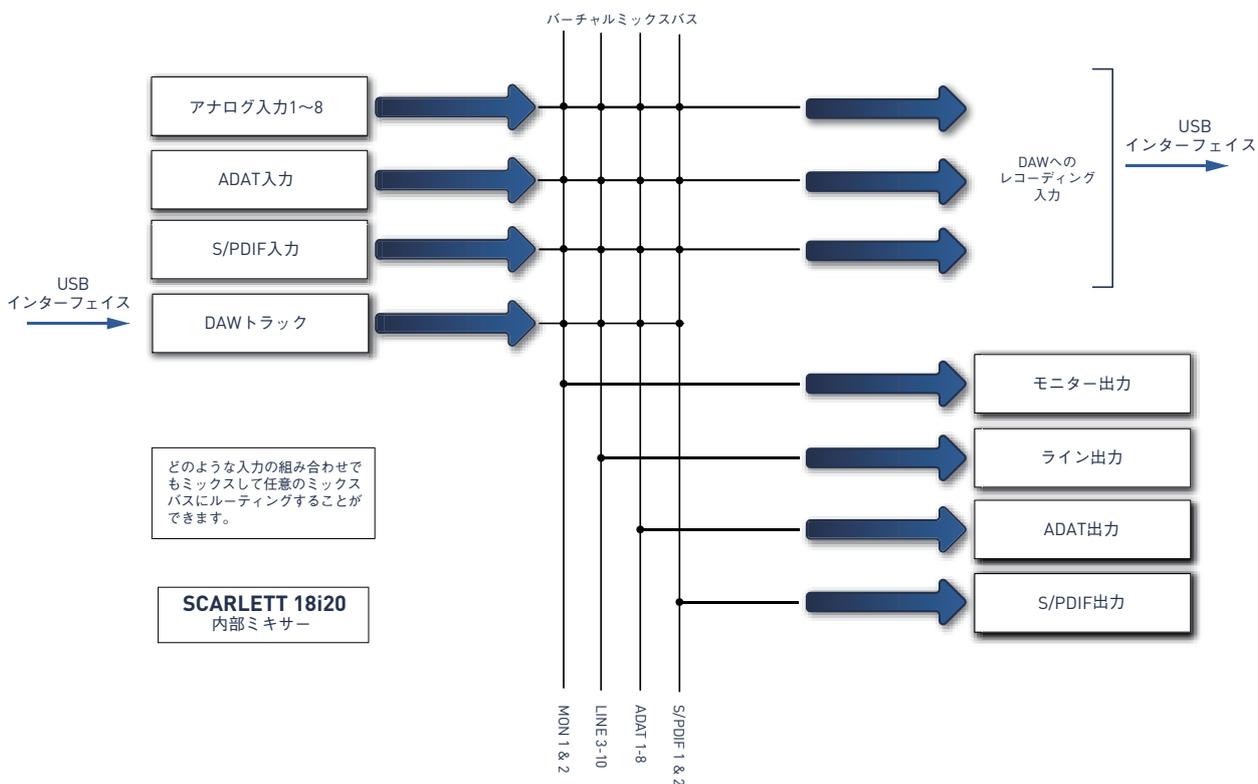
本ガイドには、2016 年 5 月時点での正確な情報が記載されています。ただし、弊社はカスタマーサービスの向上に常に取り組んでいるため、この手順は変更されることがあります。内容に変更があると思われる場合は、www.focusrite.com/get-startedで最新の情報をご確認ください。

Scarlett ミキサー – 基本原則

Scarlett インターフェースには内部オーディオミキサーが備わっています。このミキサーを使用して、お使いのシステムで様々なオーディオをソースとしたミックスを複数作成できるほか、それをインターフェースの出力部に送ることができます。これらのソースには、DAW にレコーディングしたトラックのほかに、Scarlett の入力部に接続されたソースも含まれます。Focusrite Control を使い始める前に、このミキサーの基本原則を理解することが重要です。

オーディオミキサーの基本的な概念に関しては既にご存知の方も多いかと思いますが、入力された信号数はステレオペアとして組み合わせられることがある為、その場合には入力数より少ない出力数となります。伝統的なアナログハードウェアミキサーには、たくさんの入力チャンネルが備わっており、それぞれに縦フェーダーや様々なコントロール部が搭載されています。また、チャンネルごとに備わったスイッチを切り替えることで信号が送られる場所を指定します。これを「ルーティング」と呼びます。

Scarlett に備わったミキサーはこのような一般的なミキサーと同じ仕組みです。インターフェース自体の入力部と、すでにレコーディングされたDAWトラックがミキサーの入力部となり、出力部はインターフェース自体の出力部に対応します。以下の図は、Scarlett 18i20 の例でこの原理を示しています。



重要 Scarlett 18i20 で同時に行えるミキシングは最大 18 入力/10 出力です。

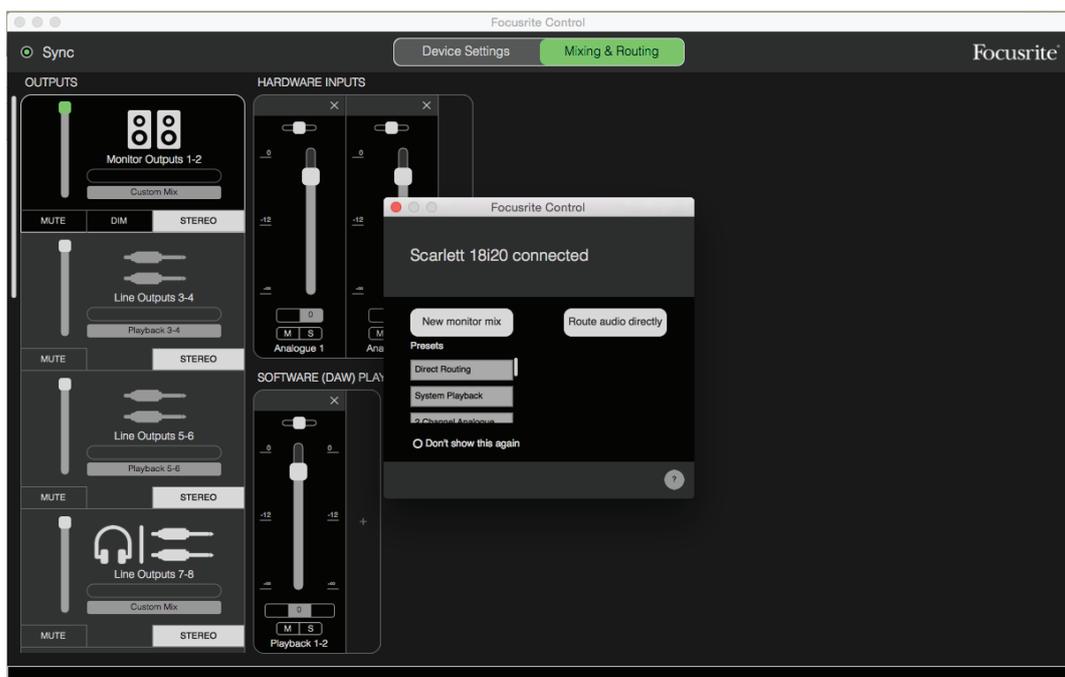
Focusrite Control ではコンピュータスクリーン上でミキサーが視覚的に表示されます。Focusrite Control の大きな利点は、実際に使用したい入力のみ表示できることです。

Mixing & Routing ページ



お使いのコンピュータに Focusrite Control をインストールすると、ドックまたはデスクトップ上に FC アイコンが配置されます。

アイコンをクリックして Focusrite Control を起動します。下図のような画面が表示されます。



注意：メインウィンドウの他に、コンピュータが適切にハードウェアに接続されていることを確認するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスには、すぐにソフトウェアを設定または再設定できるオプションも含まれています。これらについては本ユーザーガイドで後述されるので、Focusrite Control を初めて使用する場合にはこのダイアログボックスを閉じて問題ありません。

注意

上記の図ではなく、「**No Hardware Connected**」という警告メッセージが表示された場合、コンピュータがハードウェアとの接続を確認できなかったことを意味します。

その場合は以下の事項を確認してください。

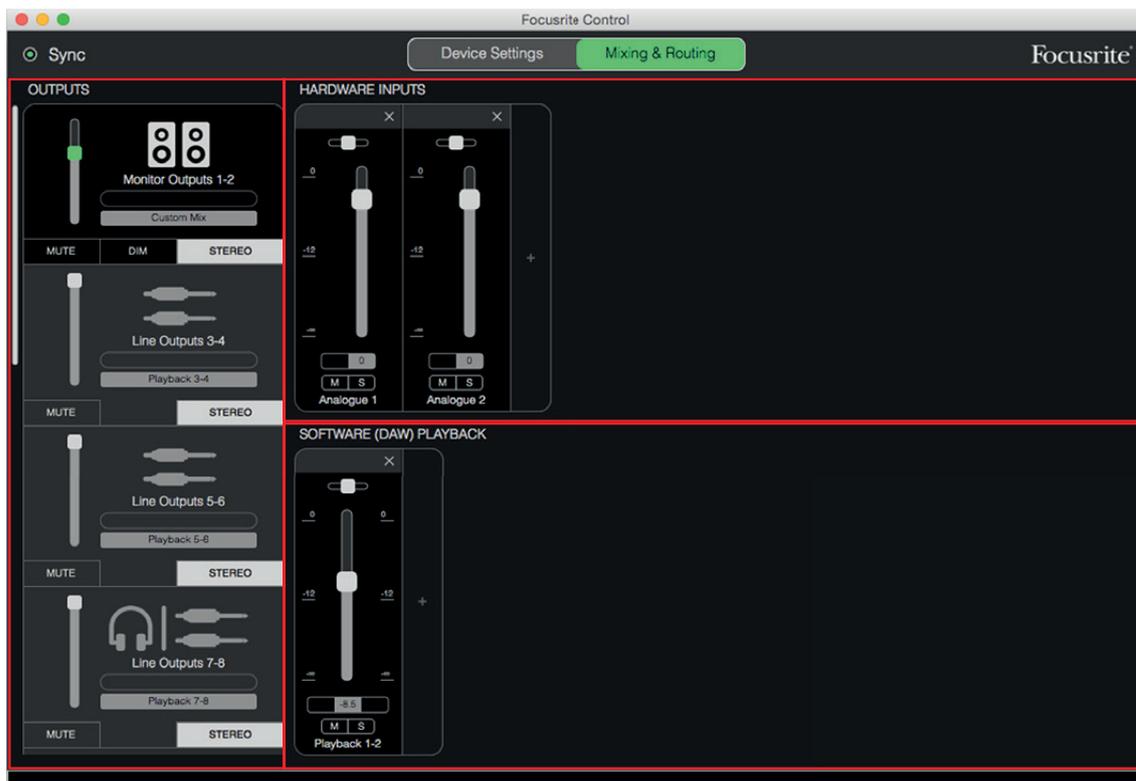
- USB ケーブルの両端が適切に接続され、ケーブルまたはコネクタのどこにも損傷がないこと。
- Scarlett インターフェースの電源が入っていること。

スクリーン左上の Sync が緑色に点灯していなければなりません。点灯している場合、Scarlett デバイスが有効なクロックソースにロックされていることを表します。詳細はページ 28 をご覧ください。

ミキサーの構成とコントロール

注意

ソフトウェアを効果的に使用していただくために、Focusrite Control 上でツールティップスをご確認いただけます。各部でカーソルをかざすと、そのコントロール部が実行する内容がウィンドウ下部のステータスバーに表示されます。



[File] > [Presets] > [Empty] の順にクリックします。一番初めはあらかじめ用意されているプリセットのミキサーを使用すると良いでしょう。**[Empty]** を選択すると、空白のテンプレートが読み込まれるため入力チャンネルが表示されません。

Focusrite Controlには **Device Settings** ページと **Mixing & Routing** ページの 2 ページしかありません。これらはウィンドウ上部のタブで切り替えられます。ほとんどの場合、**Mixing & Routing** ページを使用することになります。

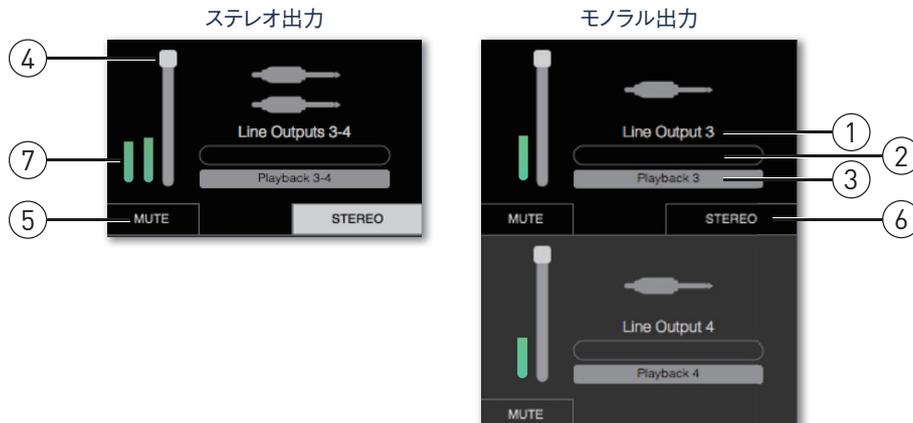
Mixing & Routing ページは以下の 3 つのエリアに分かれています。

- **OUTPUTS** : 画面左側で縦方向に配置されています。
- **HARDWARE INPUTS** : 右側の上半分に配置されています。
- **SOFTWARE(DAW) PLAYBACK** : 右側の下半分に配置されています。

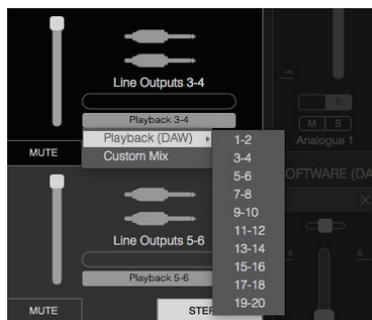
Output セクション

常に表示されている Output セクションから見てみましょう。

OUTPUTSはスクロール可能な縦のバーで構成されています。お使いのインターフェイスにスクリーンで一度に表示できる数以上の出力がある場合、下方向にスクロールして他の出力を確認します。各出力（ステレオモードの場合は出力ペア）にはそれぞれ以下の機能が備わっています。

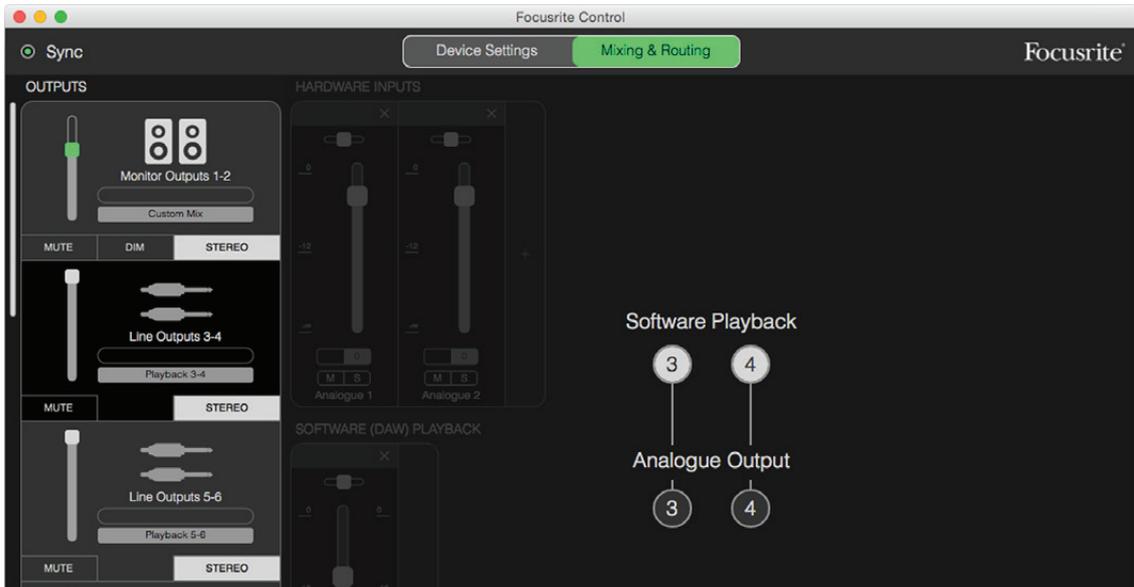


- 出力識別子（**Line Outputs 3-4** など）とアイコン - 出力名が表示されるとともに、アイコンが表示されます。スピーカー、ヘッドフォン、ジャックプラグ、フォノプラグ、Toslink のアイコンが用意されています。
- ユーザー名 - このフィールドをクリックして、出力先などの名前を最長 11 文字で入力できます。
- 現在のソース - このフィールドには、現在出力されているソース名が表示されます。多くのセットアップでは、特に Focusrite Control のプリセットを使用している場合、一種類の入力または一組のステレオペア入力デフォルトとなります。このフィールドをクリックすると、ドロップダウンリストが表示され、以下のいずれかを選択できます：
 - **Playback (DAW)** - DAWトラックを直接出力にルーティングします（出力がステレオの場合はペア）。



- **Custom Mix** - 選択した出力に対して利用可能な全ての入力（ハードウェアとDAWからの入力の両方）を使ってカスタムでミックスを作成できます。注意：5 つのカスタムミックスがすでに割り当てられている場合はこのオプションを利用できません。

出力ソースの選択を変えると、ウィンドウ右側にルーティングを示す図が表示されます。1対1のシンプルなルーティングの場合、グラフィックは以下のようになります。



4. フェーダー - フェーダーを使用して出力部のレベルを調節します。デフォルトではすべての出力レベルが最大に設定されていますのでご注意ください（ユニティーゲイン）。フェーダーのつまみが緑色の場合、出力レベルのコントロールが Scarlett フロントパネルの **MONITOR** コントロールに割り当てられます。この割り当ては **Device Settings** ページで行うことができます。ページ 26 を参照してください。
5. **MUTE** - このボタンをクリックして出力のミュートのオンオフを切り替えます。
6. **STEREO** - 出力をステレオペアのどちらか一方またはモノラル出力に割り当てます。ステレオモードでは、すべての出力機能がステレオペア形成する両方の出力に適用されます。
7. メーター - 出力でのオーディオレベルを示すバーグラフメーター（ステレオ操作用に構成される場合 2 つ）が表示されています。出力レベルがオーバーロードしクリッピングしてしまっている場合、赤く表示されます。このアイコンはメーターバーのエリアをクリックすると非表示にできます。

上記のすべての機能のほかに、Monitor Outputs にはさらに **DIM** ボタンが備わっています。有効にすると、モニターでの出力レベルが下がります（下がるレベルは接続されている Scarlett デバイスによって決まります）。

Input セクション

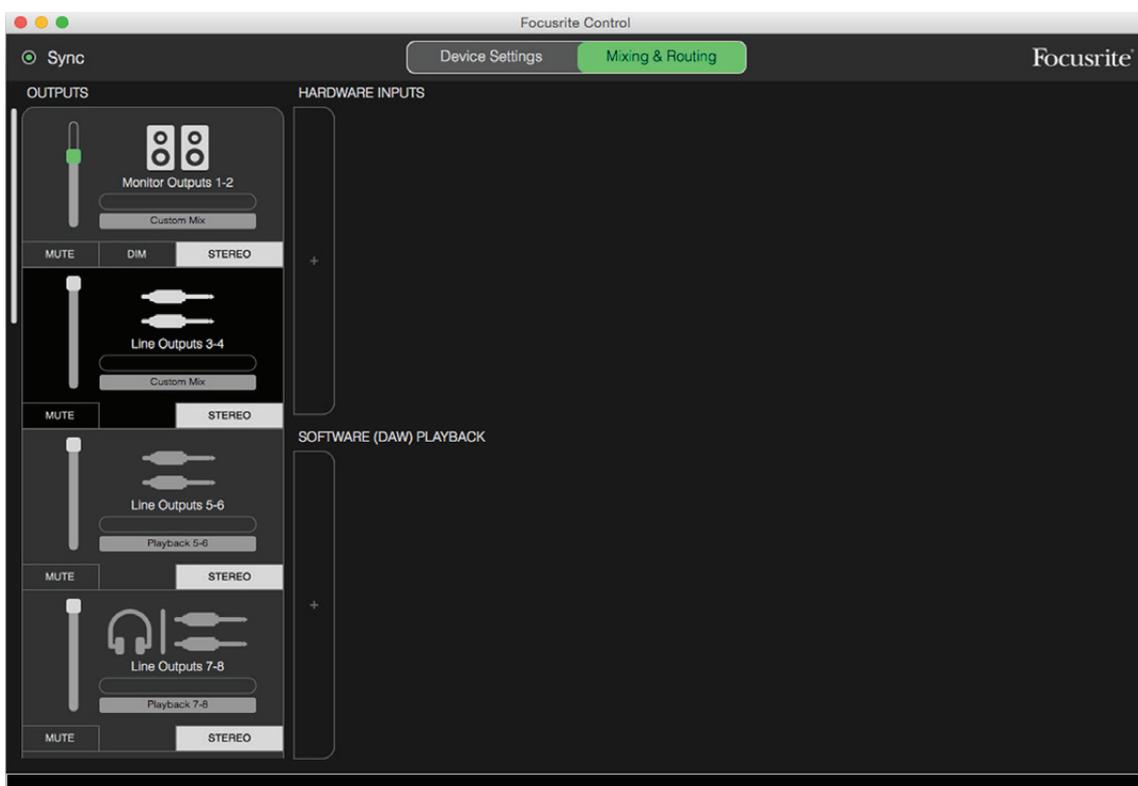
入力セクションは **HARDWARE INPUTS** と **SOFTWARE(DAW)PLAYBACK** の二つの部分に分かれています。それぞれの部分で、選択された出力でミックスされる入力信号をコントロールします。

それぞれの出力で異なるミックスを構成でき、Scarlett の内部ミキサーで可能な限り多くのミックスを作ることが可能となります。それぞれの演奏者が個人のニーズに合わせた独自のミックスを構成することができるため、この機能は複数の人数でレコーディングを行う際非常に便利です（人数分のヘッドフォンとヘッドフォンアンプがあることを前提としています）。該当する出力タブをクリックして入力チャンネルを表示したいミキサーを選択します。

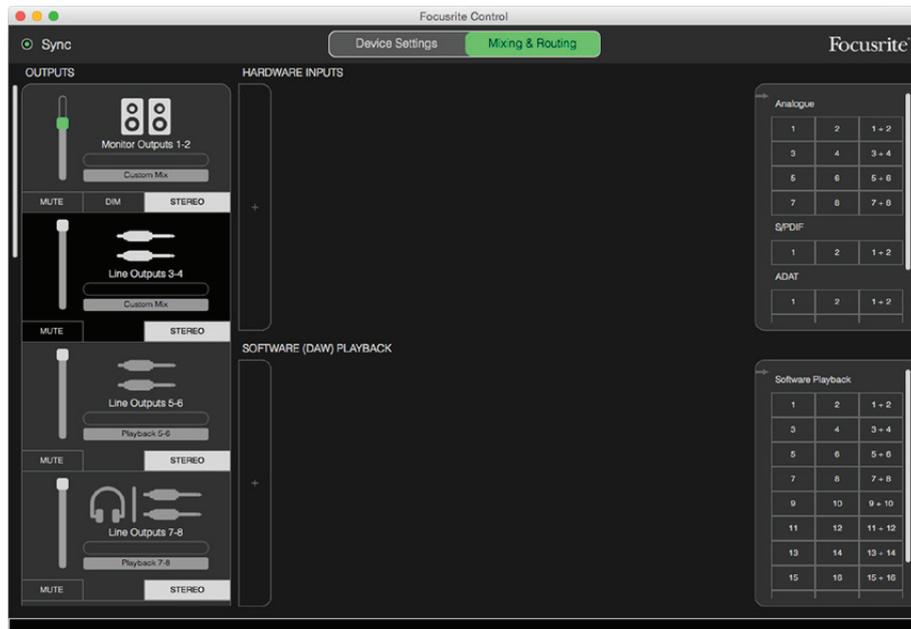
重要

ミキサーの各出力を異なる入力セットに対して作成することはできません。使用中の入力チャンネルのセットは Scarlett デバイスのすべての出力に適用されます。ただし、不要なチャンネルは簡単にミュートにできるため、それぞれのレベルに設定された個々のミックスを作成することは可能です。

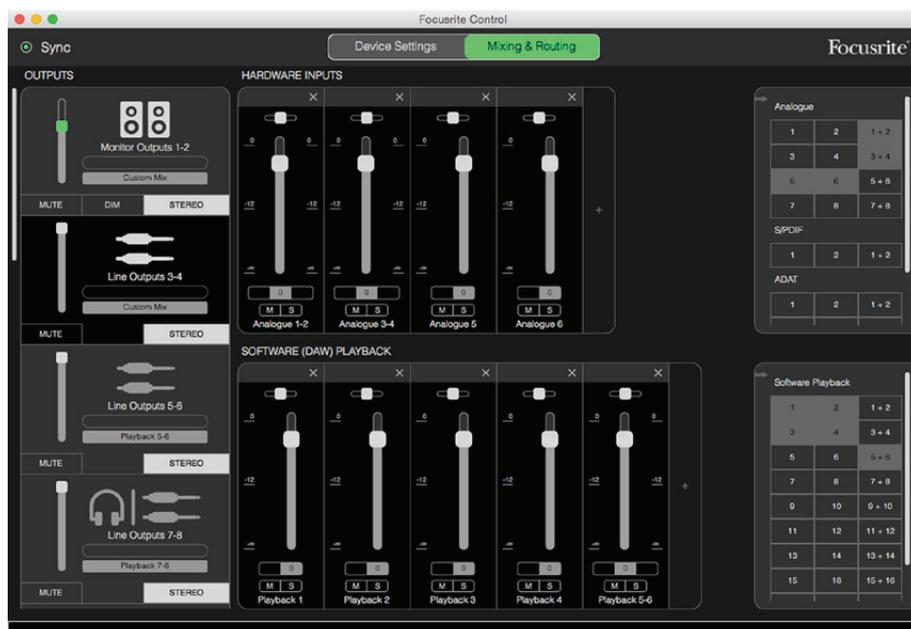
状況によっては、前述の例のようにシンプルな 1 対 1 のデフォルトルーティングを Focusrite Control でセットアップすることが適切な場合もあります。DAW の出力が Scarlett インターフェースでのハードウェア出力に直接ルーティングされる場合です（ユニット内でミキシングを行わない場合など）。しかし、カスタムミックスを作成する場合には、まずミックスを送りたい出力の出力タブで現在のソースのボタンをクリックしてから、**Custom Mix** を選択します。そうすることで出力用に現在固定されているルーティングが消去され、入力ミックスのエリアが表示されます（**Empty** プリセットが本マニュアルで前に選択されている場合、このエリアは空欄となります）。



ここで、2つの「+」タブをクリックすると、選択した出力を送るミキサーを構成することができます。構成が行われると、入力セクション半分の **HARDWARE INPUTS** に Scarlett の入力リストが全て表示されます（お使いの Scarlett デバイスで使用可能なハードウェア入力の詳細はページ 13 を参照してください）。**SOFTWARE(DAW) PLAYBACK** エリアでは、ボックス内に使用可能な DAW トラックのリストが表示されます。この手順を繰り返すことで、お使いの Scarlett ハードウェアのチャンネルを最大数追加することができます。注意：チャンネル数がウィンドウのサイズを超えた場合、ウィンドウのリサイズやスクロールバーを使用する必要があります。

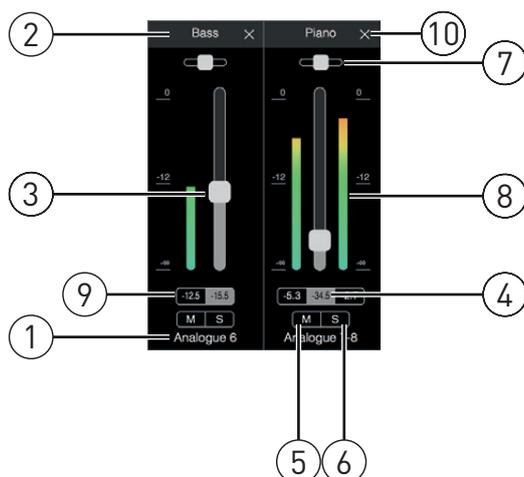


注意：両方のボックスでは各入力が個別のモノラル、またはステレオペアの半分として 2 回リストされます。入力のステレオペアを選択すると、ステレオ入力チャンネルが作成されます。



上記の例では、幾つかの DAW トラックがすでにレコーディングされ、さらに 2 つの追加のトラックをレコーディングしながら演奏者の一人に対してステレオフィードバックを作成したい、というようなオーバーダブが行われています。

各入力チャンネルには以下の特徴があります。



1. 入力識別子 - チャンネルに入力されている実際の入力です。
2. ユーザー名 - このフィールドをクリックして、楽器の名前などを最長 11 文字で入力することができます。
3. フェーダー - ミックスの信号レベルを調整するためのフェーダーです。注意：デフォルトではすべてのフェーダーが 0dB に設定されていますが、フェーダーの最大値は +6dB です。フェーダーのつまみをダブルクリックするとフェーダーが 0dB に設定されます。
4. フェーダー値 - 現在のフェーダーの数値を示します。
5. **M** - このボタンをクリックしてチャンネルのミュートのオンオフを切り替えます。
6. **S** - ソロボタン。このボタンをクリックすると、その時点で使用されている信号の代わりにチャンネルの信号がモニター出力 1 と 2 に直接ルーティングされます。この機能を使用するとエンジニアが他のトラックを気にすることなく楽器のレコーディングを行えるため、レコーディング中に大変役立つ機能です。ソロ機能は他の信号のルーティングを変更したり、DAW にレコーディングされている信号を妨害することはありません。
7. パンのスライダー。このコントロールは、ミックスがステレオ出力にルーティングされている時のみ利用できます。デフォルトでは中央に設定されており、チャンネルの信号はステレオペアの両方の出力に同じレベルで送られます。スライダーをどちらかの方向に動かすと、一方の信号よりも高い信号をもう一方の出力に送り、個々の楽器をステレオイメージ上で配置できるようにします。フェーダーのつまみをダブルクリックするとフェーダーが 0dB に設定されます。
8. 信号レベルメーター。プリフェーダーなどのチャンネルに入る信号レベルを示します。dBFS 単位で測定され、最大値は 0dBFS となります。0dBFS の場合、クリッピングを起こしており不快な音になってしまうためこちらで必ずレベルを調節しなければなりません。ステレオチャンネルの場合、フェーダーの両隣に 2 つのメーター表示されます。
9. ピークレベルディスプレイ - 達した信号レベルの最大測定数値。ステレオチャンネルでは 2 つのディスプレイが表示されます。
10. クローズ - バツ印をクリックすることで、ミックスから信号を、スクリーンからチャンネルを削除します。

Scarlett 機器で使用できるハードウェア入力

Scarlett インターフェースには、幅広いオーディオ入力がありますが、設定されたサンプルレートによって使用可能な入力数が決まります（詳細はページ 28 を参照してください）。サンプルレートを 2 倍にすると、使用できる ADAT チャネルの数が半分になります。以下の表は異なるサンプルレートで使用可能な入力の詳細を示しています。

44.1kHz ~ 48kHz			
入力	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ入力 1	アナログ入力 1	アナログ入力 1
2	アナログ入力 1	アナログ入力 2	アナログ入力 2
3	アナログ入力 3	アナログ入力 3	アナログ入力 3
4	アナログ入力 4	アナログ入力 4	アナログ入力 4
5	アナログ入力 5	アナログ入力 5	S/PDIF 入力 1
6	アナログ入力 6	アナログ入力 6	S/PDIF 入力 2
7	アナログ入力 7	アナログ入力 7	
8	アナログ入力 8	アナログ入力 8	
9	S/PDIF 入力 1	S/PDIF 入力 1	
10	S/PDIF 入力 2	S/PDIF 入力 2	
11	ADAT 入力 1	ADAT 入力 1	
12	ADAT 入力 2	ADAT 入力 2	
13	ADAT 入力 3	ADAT 入力 3	
14	ADAT 入力 4	ADAT 入力 4	
15	ADAT 入力 5	ADAT 入力 5	
16	ADAT 入力 6	ADAT 入力 6	
17	ADAT 入力 7	ADAT 入力 7	
18	ADAT 入力 8	ADAT 入力 8	

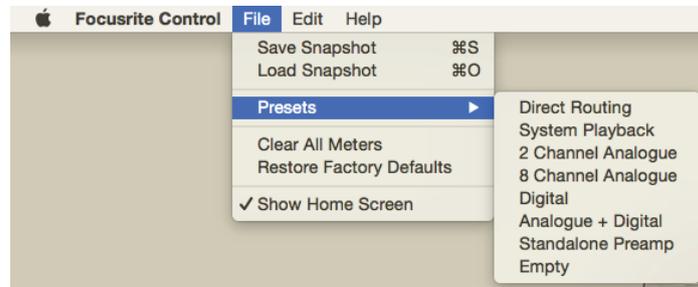
88.2kHz ~ 96kHz			
入力	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ入力 1	アナログ入力 1	アナログ入力 1
2	アナログ入力 2	アナログ入力 2	アナログ入力 2
3	アナログ入力 3	アナログ入力 3	アナログ入力 3
4	アナログ入力 4	アナログ入力 4	アナログ入力 4
5	アナログ入力 5	アナログ入力 5	S/PDIF 入力 1
6	アナログ入力 6	アナログ入力 6	S/PDIF 入力 2
7	アナログ入力 7	アナログ入力 7	
8	アナログ入力 8	アナログ入力 8	
9	S/PDIF 入力 1	S/PDIF 入力 1	
10	S/PDIF 入力 2	S/PDIF 入力 2	
11	ADAT 入力 1	ADAT 入力 1	
12	ADAT 入力 2	ADAT 入力 2	
13	ADAT 入力 3	ADAT 入力 3	
14	ADAT 入力 4	ADAT 入力 4	

176.4kHz ~ 192kHz			
入力	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ入力 1	アナログ入力 1	アナログ入力 1
2	アナログ入力 2	アナログ入力 2	アナログ入力 2
3	アナログ入力 3	アナログ入力 3	アナログ入力 3
4	アナログ入力 4	アナログ入力 4	アナログ入力 4
5	アナログ入力 5	アナログ入力 5	S/PDIF 入力 1
6	アナログ入力 6	アナログ入力 6	S/PDIF 入力 2
7	アナログ入力 7	アナログ入力 7	
8	アナログ入力 8	アナログ入力 8	
9	S/PDIF 入力 1	S/PDIF 入力 1	
10	S/PDIF 入力 2	S/PDIF 入力 2	

プリセットの使用

Focusrite Control には、素早くレコーディングタスクに取り掛かれるよう便利なプリセットが幾つか用意されています。プリセットを選択すると、使いやすく組み合わされた入力チャンネルによって自動的にミキサーが構成されます。

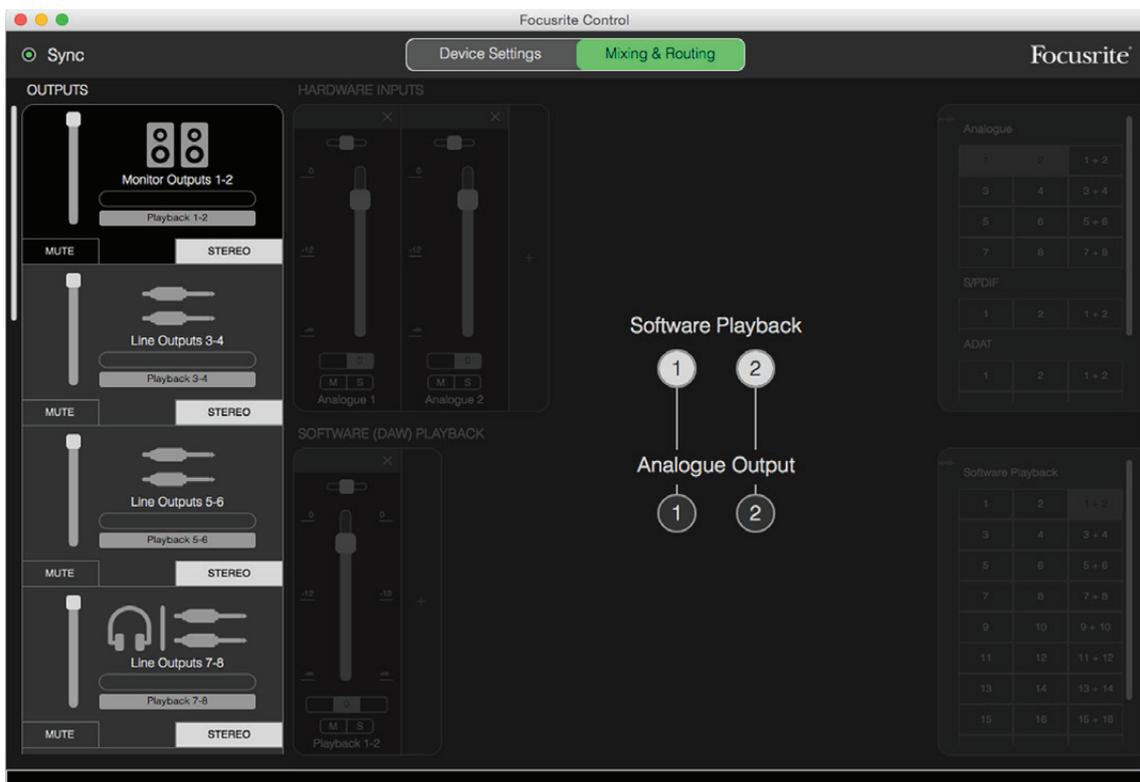
Presetsは、ファイルメニューのドロップダウンリストから選択します。Scarlett 18i20 で使用可能なプリセットを以下に示します。



Direct Routing

複雑なミキシングセッションでは、最終ミックスを実際のミキシングコンソールで個別に行うことが望ましい場合があります。

Direct Routingプリセットでは DAW の再生トラックを番号順にすべての使用可能なScarlett出力へルーティングし、このようなタスクに対応します。



Scarlett シリーズのダイレクトルーティング接続は以下の通りです。

44.1kHz ~ 48kHz			
DAW トラック	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ出力 1	アナログ出力 1	アナログ出力 1
2	アナログ出力 2	アナログ出力 2	アナログ出力 2
3	アナログ出力 3	アナログ出力 3	アナログ出力 3
4	アナログ出力 4	アナログ出力 4	アナログ出力 4
5	アナログ出力 5	アナログ出力 5	S/PDIF Out 1
6	アナログ出力 6	アナログ出力 6	S/PDIF Out 2
7	アナログ出力 7	S/PDIF Out 1	
8	アナログ出力 8	S/PDIF Out 2	
9	アナログ出力 9		
10	アナログ出力 10		
11	S/PDIF Out 1		
12	S/PDIF Out 2		
13	ADAT 出力 1		
14	ADAT 出力 2		
15	ADAT 出力 3		
16	ADAT 出力 4		
17	ADAT 出力 5		
18	ADAT 出力 6		
19	ADAT 出力 7		
20	ADAT 出力 8		

88.2kHz ~ 96kHz			
DAW トラック	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ出力 1	アナログ出力 1	アナログ出力 1
2	アナログ出力 2	アナログ出力 2	アナログ出力 2
3	アナログ出力 3	アナログ出力 3	アナログ出力 3
4	アナログ出力 4	アナログ出力 4	アナログ出力 4
5	アナログ出力 5	アナログ出力 5	S/PDIF 出力 1
6	アナログ出力 6	アナログ出力 6	S/PDIF 出力 2
7	アナログ出力 7	S/PDIF 出力 1	
8	アナログ出力 8	S/PDIF 出力 2	
9	アナログ出力 9		
10	アナログ出力 10		
11	S/PDIF 出力 1		
12	S/PDIF 出力 2		
13	ADAT 出力 1		
14	ADAT 出力 2		
15	ADAT 出力 3		
16	ADAT 出力 4		

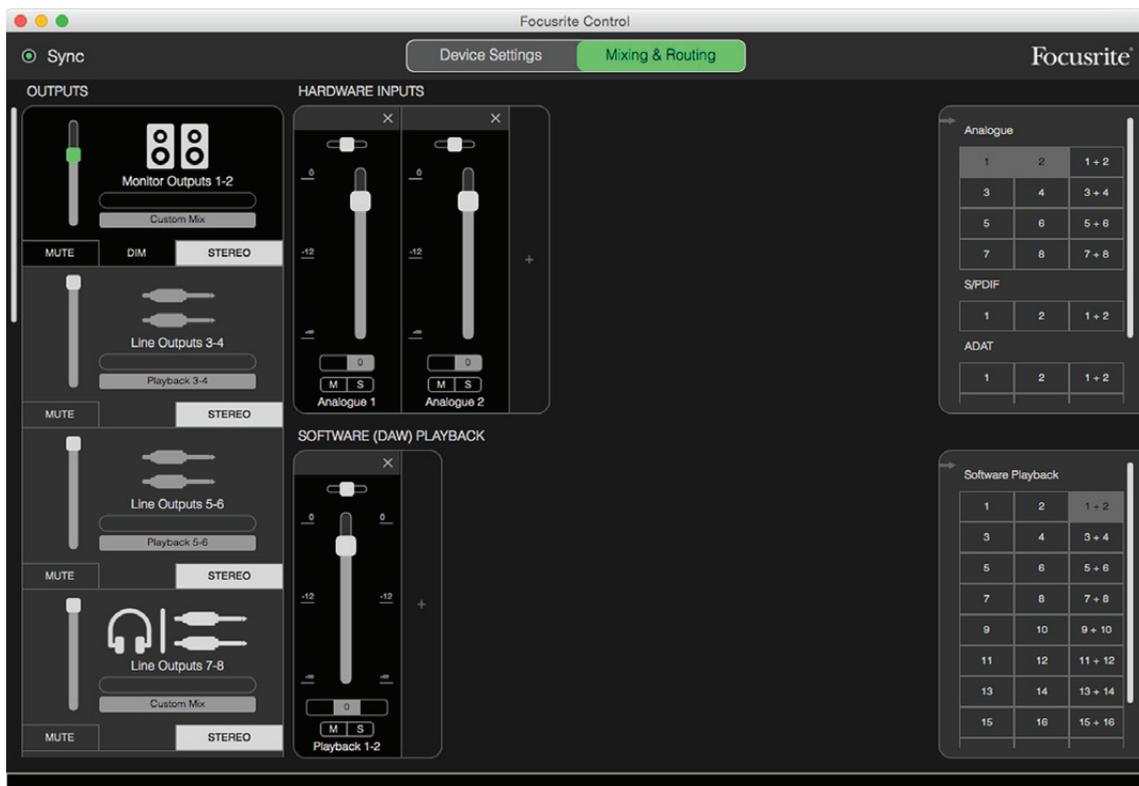
176.4kHz ~ 192kHz			
DAW トラック	Scarlett 18i20	Scarlett 18i8	Scarlett 6i6
1	アナログ出力 1	アナログ出力 1	アナログ出力 1
2	アナログ出力 2	アナログ出力 2	アナログ出力 2
3	アナログ出力 3	アナログ出力 3	アナログ出力 3
4	アナログ出力 4	アナログ出力 4	アナログ出力 4
5	アナログ出力 5	アナログ出力 5	S/PDIF 出力 1
6	アナログ出力 6	アナログ出力 6	S/PDIF 出力 2
7	アナログ出力 7	S/PDIF 出力 1	
8	アナログ出力 8	S/PDIF 出力 2	
9	アナログ出力 9		
10	アナログ出力 10		

プリセットで従来のアナログコンソールを最大限にご利用いただくには、適切なADAT 搭載の D/A コンバータおよび S/PDIF 入力が備わった 2 チャンネル D/A コンバータが必要です。ただし、最新のデジタルミキサーの多くは ADAT および S/PDIF 信号とアナログソースを直接受けることができます。

2 Channel Analogue

これは Scarlett をアナログレコーディングの「フロントエンド」として使用する際に使用するプリセットです。このプリセットでは、アナログ入力 1 と 2 を **HARDWARE INPUT** として、DAWトラック 1 と 2 を **SOFTWARE(DAW) PLAYBACK** セクションにおいてステレオチャンネルとして利用可能となるよう Scarlett のルーティングを構成します。

例えば Scarlett 18i20 では常に、これらの入力チャンネルがまとめられてモニター 1 と 2、ライン出力 7 と 8、9 と 10 にステレオペアとしてルーティングされます。本モデルでは、ヘッドフォン出力 1 と 2 は、フロントパネルのそれぞれのヘッドフォンレベルのコントロールによってそれぞれライン出力 7/8 および 9/10 に従います。この設定では、既にDAWにレコーディングされたドラムトラックにギタリストx1、ボーカリストx1 の音源をレコーディングする際に理想的です。ドラムとのミックスをそれぞれ個別に行うことが可能です。



レコーディングするトラックが増えた場合には、DAWの再生トラックをミックスに追加するだけです。

その他すべての Scarlett の出力は、ページ 16 のダイレクトルーティング一覧に従って、対応するDAWの再生トラックから直接供給されます。

8 Channel Analogue

バンドのレコーディングを始める際にはこのプリセットを使用すると良いでしょう。Scarlett 18i20 では、このプリセットによりハードウェアアナログ入力それぞれに対し 1 つずつ、計 8 つのミキサーチャンネルが使用でき、DAWトラック 1 と 2 も、ステレオチャンネルとして使用ができます。



2チャンネルアナログプリセットについては、まとめられたミキサーの出力がモニター出力1と2、および、ライン出力7～10にステレオペアとしてルーティングされます。

Scarlettのその他の全ての出力は、ページ16のダイレクトルーティング一覧に従って、対応するDAWの再生トラックから直接供給されます。

Digital

このプリセットは、Focusrite OctoPre Mk II などの ADAT 搭載の別のマイクプリアンプを使用する際に使用すると便利です。Scarlett 18i20 と併せて使用することで、10 個のデジタル入力チャンネルが使用できます。そのうち 8 個は ADAT 入力ポートから、2 個は S/PDIF 入力から供給されます。DAWトラック 1 と 2 も、ステレオチャンネルとして使用できるようになります。前述のアナログプリセットの説明と同様に、まとめられた入力は同じ出力ペアにルーティングされます。



その他すべての Scarlett の出力は、ページ 16 のダイレクトルーティング一覧に従って、対応する DAW の再生トラックから直接供給されます。

Empty

このプリセットは、ユーザーが必要に応じて独自の構成を構築できるよう既存のミキサーの設定を消去する便利な機能です。

Scarlett 18i20 では、モニター出力 1 と 2 およびライン出力 7 ~ 10 (ヘッドフォン出力と並列になります) がカスタムのミックスを受信するよう設定されます。その他すべての出力は、他のプリセット同様に個別の DAW トラックから供給されます。

使用例

レコーディングとトラックング

Focusrite Control を使用すれば、バンドのレコーディングも自身のレコーディングも、そのプロセスは基本的には同じです。スクリーンに表示されるミキサーチャンネルの数のみが変化します。

Scarlett にレコーディングしたい楽器を INST または LINE 入力のどちらかを使用して接続し、アコースティック楽器とボーカルは、マイクを MIC 入力に接続して録音を行います。楽器またはマイクロフォンは、それぞれUSBケーブルを經由してユーザーのDAWにルーティングされレコーディングされます。デフォルトでは、ハードウェア入力と同じ数のトラックにレコーディングされます。Scarlettのフロントパネルにあるゲインコントロールでレコーディングレベルの調整ができます。ユーザーのご希望に応じてDAWでトラック割り当てを変更することができます。

Focusrite Control を使用して、レコーディングされているものすべてをモニターミックスすることが可能です。モニターまたはヘッドフォンで聞くミックスは、レコーディングされた信号レベルとは完全に独立したものにカスタムすることができます。

Focusrite Control の全てのチャンネルはフェーダーがゼロの位置で開始されるので、すべての接続が完了したらまづラフなミックスを聞くことになります。その後で独自のミックスを構成することができます。



いずれのプリセットを読み込んだ場合にも、ヘッドフォン出力から聞こえるミックスは、メインモニターのミックスと同じものです。ただし、それらは独立しており個別にコントロールが可能です。例えば、演奏者のフォールドバック用にヘッドフォンを使用したい場合、様々なミックスを設定する必要があるはずですが、ヘッドフォンの出力タブ（Scarlett 18i20 の例では**Line Out7 ~ 8**）を選択するだけでミックスを変更することができます。同じ要領で、さらに Line Outタブを使用して **Custom Mix** を選択することで、他の演奏者用に別のミックスを作成することができます。

レコーディングとオーバーダビング

オーバーダビングとは、すでに配置したトラックを聞きながらマルチトラックのレコーディング音源に楽器を追加するプロセスのことです。

Focusrite Control では、オーバーダビングを行うための構成を簡単に行うことができます。



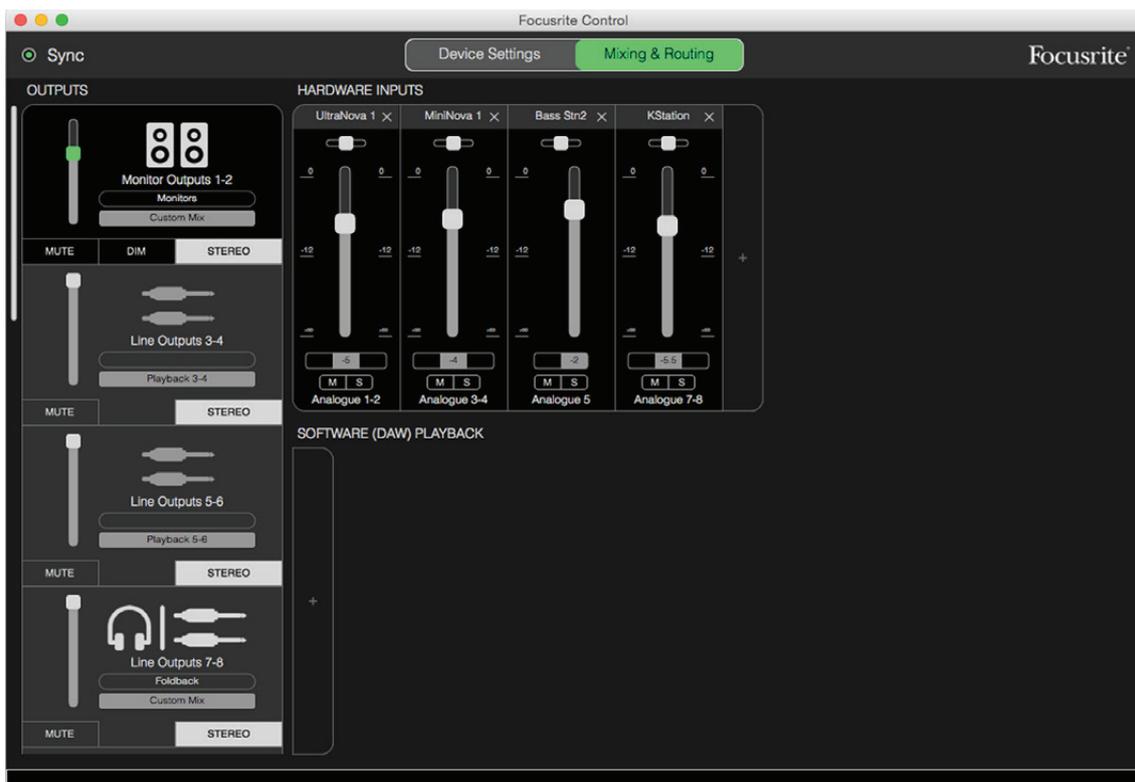
トラックの例と同様に、モニター出力とヘッドフォン出力の両方から聞こえる最初のミックスは、既にユーザーがレコーディングした全てのトラックのラフなミックス（フェーダーがゼロ位置）です。希望に応じて、オーバーダビング中の楽器やレコーディング済みの他のトラックのヘッドフォンから聞こえるレベルを調整することができます。

ヒント:レコーディング済みのトラックは、Focusrite Control の **Software Playback 1 ~ 2** の DAW マスター出力 (1 ~ 2) から出力されます。プロデューサーがレコーディング済みの音源のレベルを演奏者用に調整したい場合は DAW 上で行い、プロデューサーが DAW のミックスを変更したくない場合は別の出力から送って Focusrite Control 内でレベルの調整をすることが可能です。

スタンドアロンのミキサーとしての使用

一度 Scarlett の内部ミキサーを Focusrite Control で構成すれば、USB ケーブルを抜いて機器の電源を切っても、その構成自体が機器内に記憶されます。つまり、コンピュータに接続することなく優れた Scarlett のアナログ性能をライブ現場で実現することができるのです。

この例では、ステージ上のキーボードのミキサーとして使用しています。複数のキーボードを Scarlett の入力部に接続してまとめてモニター出力に送り、ミックスすることが可能です。それぞれのキーボードの相対的なレベルは、フロントパネルで調整することができます。



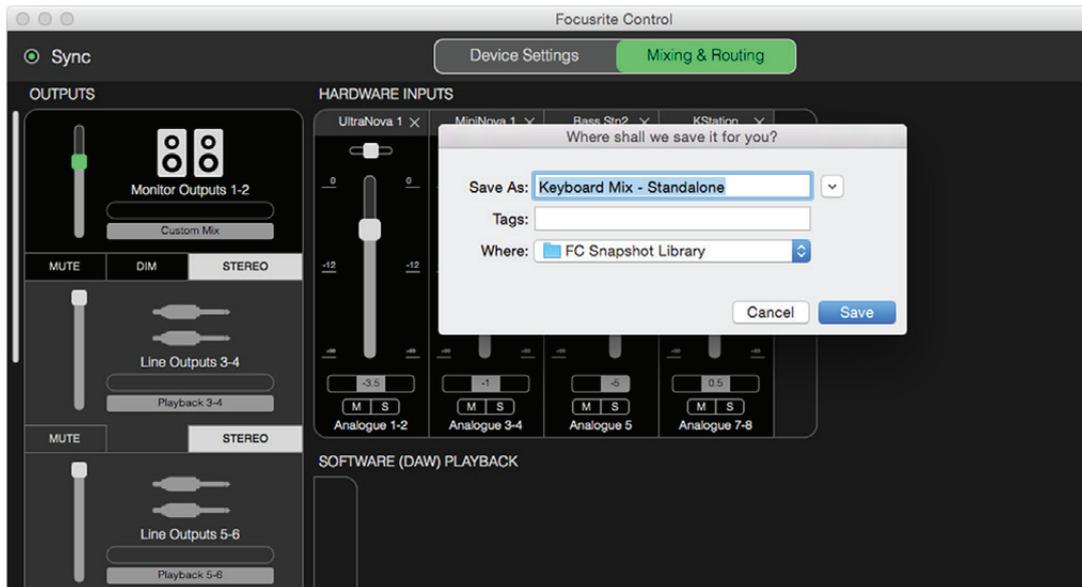
このような場合、ミキサーを上図のように設定します。Scarlett は最後の設定を記憶するため、一度 Scarlett の電源を切っても会場スタンドアロンでの使用が可能です。

スナップショット機能

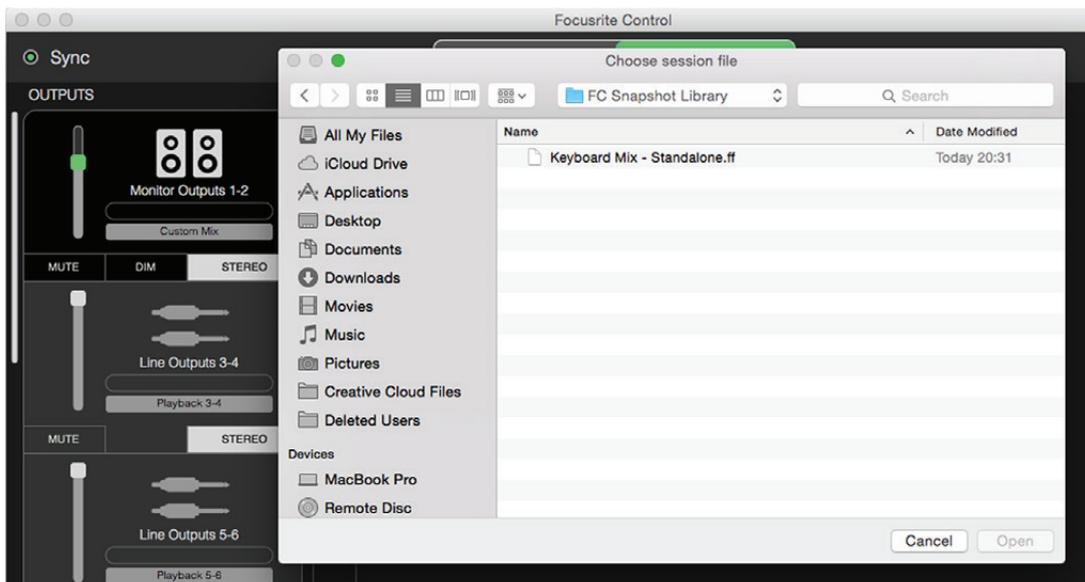
Scarlett インターフェース内のミキサーは Focusrite Control で行われた最後の設定を常に記憶します。しかし、似たようなプロジェクトや別の互換性のあるハードウェア機器で作業する場合、セッションの設定を保存したうえで、後からそのミキサーのレイアウト、フェーダー、ミュート、およびパンの設定等に戻したい場合もあります。

そのような場合に使えるのが、Focusrite Control のスナップショット機能です。この機能ではミキサー全体の「スナップショット」をお使いのコンピュータに保存し、後で呼び出すことができます。

現在のミキサーの設定を保存するには、**[File] → [Save Snapshot]** をクリックします。



スナップショットのセッションファイルは、*.ff 拡張子で保存されます。セッションを呼び出すには、**[File] → [Load Snapshot]** をクリックすると、ファイルを選択するウィンドウが現れるので、ファイルを保存した場所を選択し、開きます。



Focusrite Control を起動する際に表示されるダイアログボックスからも、最近保存されたセッションファイル（**【Recent Snapshots】**）およびプリセット（**【Mix Templates】**）を読み込むことができます。本ソフトウェアを使用していくうちにこのボックスの表示が不要になった場合、**【Don't show this again】** をクリックすることも可能です。

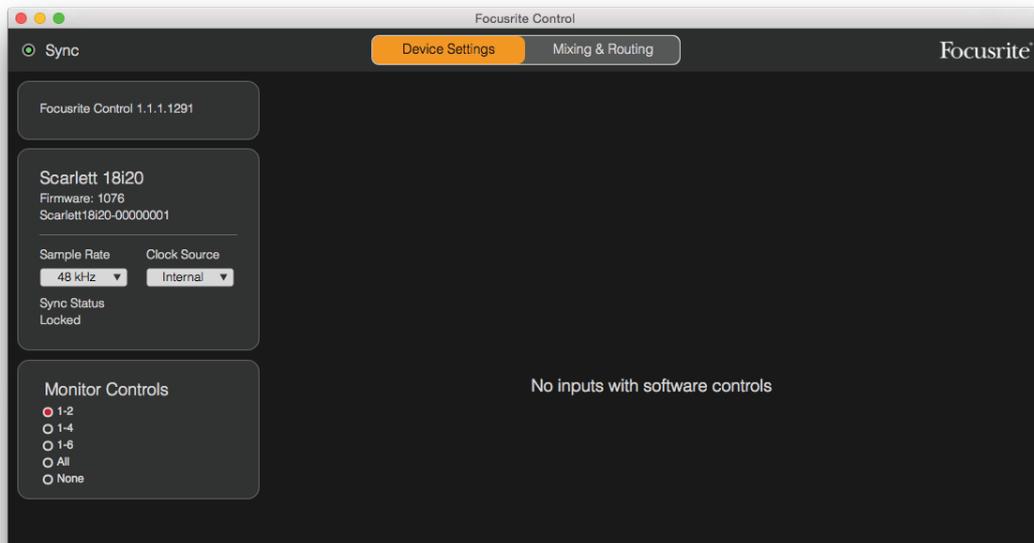
新しいデフォルトのミックステンプレートを開くには、**【New Monitor Mix】** をクリックします。Scarlett 18i20 では、**【New Monitor Mix】** をクリックすると、**【2 Channel Analogue】** のプリセットが開きます。

インターフェース内部の設定を Focusrite Control に読み込むには、**【Load from device】** をクリックします。インターフェースを別のコンピュータに接続する場合などに便利です。

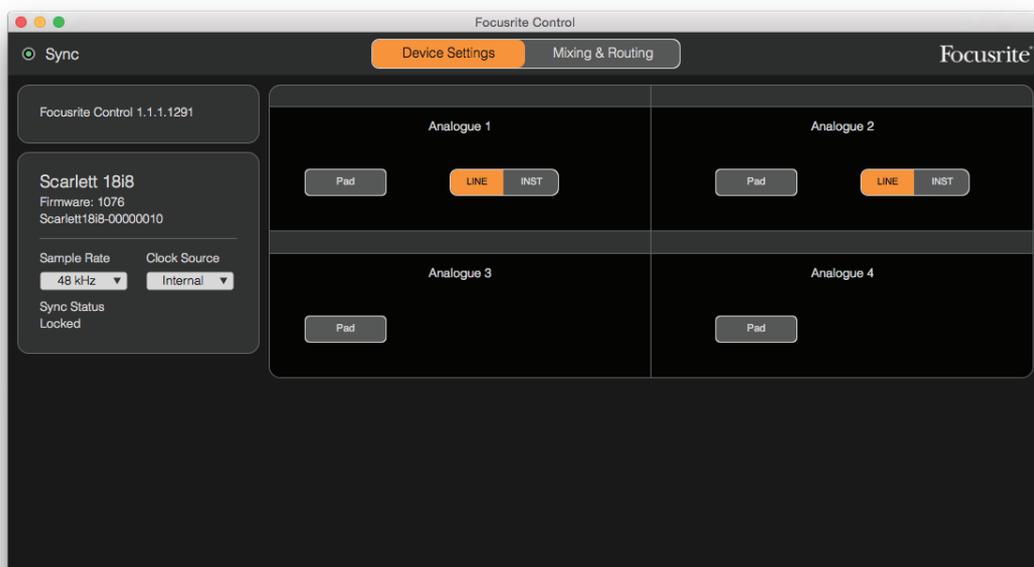
Device Settings ページ

Focusrite Control から操作すれば、Scarlett のインターフェース自体のコントロールよりも多くの機能を操作できます。

これらの機能には、**[Device Settings]** ページからアクセスできます。Scarlett 18i20 では、このように表示されます。



モデルの異なる Scarlett をお持ちの場合、ほとんどの機能は同じですが、インターフェースにはソフトウェアで設定を切り替える必要のあるチャンネルが含まれている場合があります。例えば、18i8 および 6i6 はソフトウェア上のスイッチでラインと楽器入力の切替を行うことができ、切り替えが可能な Pad も備わっています。以下のスクリーンショットは、18i8 の **[Device Settings]** ページでの例を示しています。



INST / LINE (6i6および18i8 インターフェースのみ)

これらのインターフェース上の2つのチャンネルは、エレキギターやベースを直接接続するための楽器入力となっています。INST を選択した場合アンバランス入力となり、ゲインとインピーダンスを変更することでエレキギターのような高インピーダンスのソース用にプリアンプを最適化します。

フロントパネルの赤色のLEDで、**INST**モードが選択されていることが確認できます。

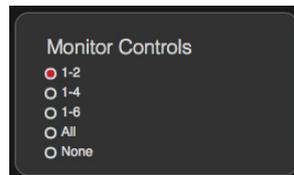
スイッチを切り替えると、**LINE**モードになります。このモードでは、標準的なバランスラインレベル信号に適した入力になります。

インターフェースのすべてのチャンネルは、ダイナミックもしくはコンデンサーマイクに対応しています。コンボタイプのコネクタは、XLR プラグまたはジャックプラグのいずれかを感知し、マイクまたはラインの操作用に自動的にプリアンプの再設定が行われます。INST 機能を持つチャンネルでは、同じコネクタを使用します。

モニターコントロール

従来型のロータリーコントロールは、マスターモニタリングボリュームを調整する際非常に便利（かつ伝統的）です。Scarlett のインターフェースには、フロントパネルに **MONITOR** コントロールが備わっています。ただし 18i20 では、Focusrite Control を使用すれば、さらに詳細な設定を行うことができます（注意：Scarlett 6i6 または 18i8 には、このような追加機能はありません。）

デフォルトでは、**MONITOR** コントロールでモニター出力 1 と 2 を調整し、さらにミュートおよび DIM コントロールが行えます。Scarlett 18i20 の他の出力を別のスピーカー用（ニアフィールド、LCR やサラウンド環境など）に使用する場合、ロータリーコントロール、ミュート、DIMスイッチを制御できるように割り当てることも可能です。



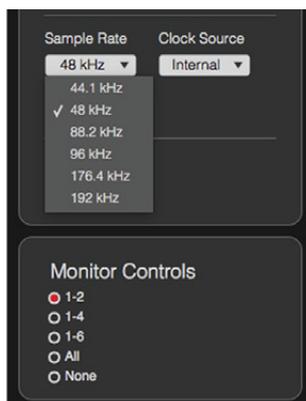
選択例：

- **1-2** – モニター出力 1 と 2（デフォルト設定）
- **1-4** – モニター出力 1 と 2 およびライン出力 3 と 4
- **1-6** – モニター出力 1 と 2 およびライン出力 3 ～ 6
- **All** – モニター出力 1 と 2 およびライン出力 3 ～ 10
- **None** – ロータリーコントロール、ミュートおよびDIMスイッチは無効。出力レベルはソフトウェアのフェーダーで制御可能。

注意：出力 7 ～ 8 および 9 ～ 10 は、ヘッドフォン出力と共有されていますので、それらをモニターコントロールに割り当てるとヘッドフォン出力に影響を与えます。

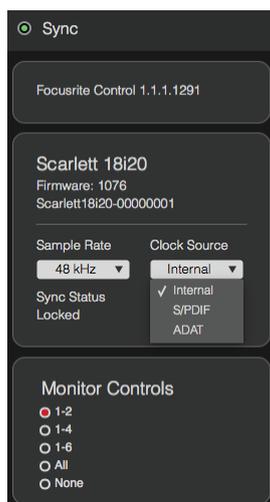
[Mixing & Routing] ページの Output タブでは、機器のロータリーコントロールに割り当てられた出力に対してフェーダーのつまみが緑色になります。つまり、スクリーン上のフェーダーは操作不可となり、それらの出力レベルは機器のフロントパネルから調整する必要があります。ただし、スクリーン上のフェーダー位置、ミュートおよび DIM のステータスは機器自体の操作に反映されます。

サンプルレート



Scarlett インターフェースは、以下 6 つのいずれのサンプルレートでも動作することが可能です：44.1kHz、48 kHz、88.2 kHz、96kHz、176.4kHz、192kHz。デフォルトのサンプルレートは 48kHz です。必要に応じてサンプルレートを選択してください。注意：176.4/192kHz のサンプルレートを使用している際、オプティカル入力は無効になります。

クロックソース



互いに接続されたデジタルオーディオ機器は常に同じクロックソースを使用しなければなりません。Scarlett インターフェースでは、以下の 3 つのソースから同期することが可能です。

- **Internal** – 内部的に生成されたリファレンスクロック。デフォルトではこちらが選択されています。
- **S/PDIF** – S/PDIF IN のコネクタに組み込まれたクロック信号。
- **ADAT** – オプティカル IN コネクタに組み込まれたクロック信号。

どちらのソースを選択した場合にも、Scarlett リアパネルの BNC ソケットの **WORD CLOCK OUT** でそのクロック信号が有効となり、他のデジタル機器との同期が可能になります（18i20 のみ）。

トラブルシューティング

トラブルシューティングに関する質問がある場合は、Focusrite Answerbase にアクセスしてください。

<https://support.focusrite.com/hc/en-gb/requests/new> このサイトでは、多数のトラブルシューティング例を説明する記事が掲載されています。

著作権表示と法定通知

Focusrite は登録商標です。Focusrite Controlおよび Scarlett は、Focusrite Audio Engineering Limited の商標です。

その他すべての商標および商品名は各所有者の財産です。

2016 © Focusrite Audio Engineering Limited. All rights reserved.